



想い | つくる | 伝える



亀田に驚く

がんばろう ● ニッポン!

例年になく厳しい冬を過ごし、満開の花を咲かせた「藤五郎梅」。梅の実は、梨とともに江戸時代から栽培されていた亀田の特産物。主産地の荻原根地区では、曲がりくねった村道の奥から、ふいに梅畠が現れる。「かめだ梅まつり」(3月25日~4月8日)の期間中、畠周辺を散策する観光客に目もくれず栽培農家の人が梅の手入れに勤しんでいた。

Take Free

ご自由にお持ちください

花咲く城下町

[新発田市大手町] 文 / 本望典子

にいがた
めぐり
vol. 9



雪国の中は、ひとときわ感慨深いものである。昔に比べて積雪量は少なくなったものの、やはり身体の芯から凍えるような、長く厳しい冬の終わりは喜ばしい。花冷えの寒さの中でもお花見を楽しむ人が多いのも、これから訪れる暖かなシーズンを待ち焦がれてのことではないだろうか。

しかも桜と城という組み合わせは最強。新発田川の水を巡らせた堀に、桜と城が映り込む…まさに日本的心ここにあり、といった風情満載だ。

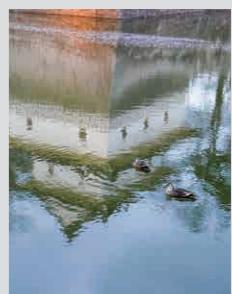
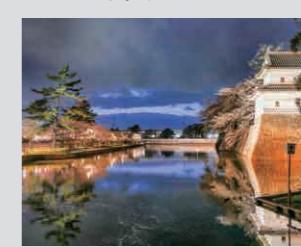
新発田城は、幼いときに一度連れてきてもらっているがほんやりとしか憶えていない。今回改めて訪れてみると、とても綺麗に手入れされている印象を受けた。平成16年に一部復元されたと聞いて納得したが、実は現存建築がある城跡は県内唯一だそう。しかも美観を重視した技法が用いられているということで調べてみると、石垣に隙間がない「切込はぎ」や、平瓦と漆喰を使った工法「海鼠壁」など、随所に特有の建築法が見られる。それがライトアップされ、桜の花びらとともに幻想的に浮かび上がる。今しか味わえない粹というものだろう。

小さな島の日本では、新しい活路をもとめた先人が、山の天辺まで、または今号の亀田郷のように沼のなままで開墾してきた。その心が町や村の独特的景観をつくりあげた。砂丘列に誕生した旧亀田町の村々は、集落を載せる大地の違いを残したまま、それぞれのルーツが色濃く記されていた。それほど広くない地域で、これほど個性の差がある町も珍しい。高い砂丘、低く小さな砂丘、砂丘の縁に造る土地、竹林に囲まれた地区、椿や女竹の生け垣のある地区、そして先の見通せない狭い村なかの道が多い地区など、そこそこ現代人が忘れかけている人のぬくもりと日本人の美意識がちらばっていた。インスタ世代でも、インバウンドでも、きっと心をうつだらう。その背景にある開拓史とともに、多くの人に現地で味わってほしいと思う。・10年間、小説をお読みいただき感謝申しあげます。また取材にご協力いただいた数多の皆様方に、心よりお礼申しあげます。(波川)

私自身、あまりお城には詳しくないが、一般的な山城ではなく平地に建てられた城というだけでも、どれだけ新発田のまちの政治・経済・交通の発展に寄与したかは想像に難くない。

すぐそばにある新発田公園には、ぼっぼ焼きなどの屋台が軒を連ねる。家族連れがはしゃぐ。カップルがゆっくりと歩調を合

わせる。雅楽を演奏する団体もいる。その美しい音色がより一層趣を深めて、訪れる人を魅了する。五感をうるおす、城下町の春。堀部安兵衛(武庸)の銅像の表情も、心なしか穏やかに見えるようである。



新発田城

住所 / 新発田市大手町6-4

概要 / 新発田重家が本拠とした旧新発田城跡に、慶長3年(1598年)、加賀国大聖寺から入封した初代藩主溝口秀勝(みぞぐちひでかつ)が築城。3代目宣直(のぶなお)の時代に完成。本丸には実質上の天守として三階櫓が築かれた。丁字型の屋根に3匹の鯱(しゃちほこ)が載る特徴的な三階櫓は、辰巳櫓とともに平成16年に復元。

国指定重要文化財。「日本100名城」に選定(平成18年4月)。別名「菖蒲(あやめ)城」とも呼ばれている。城下町はさたのシンボルである。

ふうど 2018春号 vol.40

企画編集 ふうど編集室

発行人 高橋 佑

取材編集 浅川綾子

佐々木聰

写 真 波部佳則

デザイン 斎藤道司

題 字 小林 翠

編集後記

小さな島の日本では、新しい活路をもとめた先人が、山の天辺まで、または今号の亀田郷のように沼のなままで開墾してきた。その心が町や村の独特的景観をつくりあげた。砂丘列に誕生した旧亀田町の村々は、集落を載せる大地の違いを残したまま、それぞれのルーツが色濃く記されていた。それほど広くない地域で、これほど個性の差がある町も珍しい。高い砂丘、低く小さな砂丘、砂丘の縁に造る土地、竹林に囲まれた地区、椿や女竹の生け垣のある地区、そして先の見通せない狭い村なかの道が多い地区など、そこそこ現代人が忘れかけている人のぬくもりと日本人の美意識がちらばっていた。インスタ世代でも、インバウンドでも、きっと心をうつだらう。その背景にある開拓史とともに、多くの人に現地で味わってほしいと思う。・10年間、小説をお読みいただき感謝申しあげます。また取材にご協力いただいた数多の皆様方に、心よりお礼申しあげます。(波川)

発行所

ふうど 編集室
まるごと印刷の
株式会社タカヨシ

■本社・工場 / 〒950-0141 新潟県新潟市江南区亀田工業団地1丁目3-21 TEL (025) 381-2000 FAX (025) 381-4800
■東京支社 / 〒113-0034 東京都文京区湯島3丁目24-11 湯島北東ビル2階 TEL (03) 3837-4488 FAX (03) 3837-4884
■仙台営業所 / 〒980-0011 宮城県仙台市青葉区上杉5丁目3-47 上杉オオハラビル501号室 TEL (022) 266-1711 FAX (022) 266-1712
■名古屋営業所 / 〒465-0093 愛知県名古屋市名東区一社1丁目79 第六名昭ビル6A TEL (052) 753-8080 FAX (052) 753-8081
■オフィシャルサイト / <http://www.takayosi.co.jp>

「ふうど」はここに置いてあります

【新潟市】<中央区>ANAクラウンプラザホテル新潟、駅前オフィスNII GATA、NSG学びステーション、NST、NPO法人 Made in 越後、上古町商店街、旧小瀬家住宅、県立自然科学館、砂丘館、佐藤商会、佐渡汽船ターミナル、田中屋本店みどり工房、朱雀メッセ、新潟NPO協会、新潟絵屋、新潟 加島屋本店、新潟県政記念館、新潟県庁広報展示室、新潟県民会館、新潟県立図書館、新潟国際情報大学、新潟中央キャンパス、新潟市民活動支援センター、新潟市生涯学習センター、新潟市食育・花育センター、新潟市中央図書館、新潟商工会議所、新潟市歴史博物館、新潟ユニゾンプラザ、ビアBandai、ホテルリタリア軒、ホリデイリゾート新潟、リューフ島湯、新潟空港、<江南区>介護老人保健施設亀田園、新潟市立亀田図書館、西蒲区カープトチ、ドメス・シオ、秋葉区カフュギラリーやまぼうし、川内自動車、新津鉄道資料館、新潟市立歴史博物館、紫雲寺地区公民館、新発田市生涯学習センター、新発田市民文化会館、新発田市立亀田図書館、豊浦地区公民館、【聖籠町】聖籠観音の湯 ざぶーん【村上市】イヨギヤ会館、村上市観光協会、長岡市立科学博物館、長岡市立中央図書館、長岡西病院、やまこじ復興交流館おたらる【燕市】分水ビターラーメン、【出雲崎町】越後出雲崎天領の里、【湯沢町】曾国觀光舎 越後湯沢温泉【南魚沼市】桜井【佐渡市】SADO伝統文化と環境福祉の専門学校、ホテル佐渡【東京都】<渋谷区>表参道・新潟館ネスパ、<中央区>ブリッジにいがた、<千代田区>新潟市東京事務所、【横浜市】<渋谷区>表参道・新潟館ネスパ、<中央区>ブリッジにいがた、<千代田区>新潟市東京事務所、本誌に掲載されている写真等の無断転載はご遠慮ください。

エコプレス
バイイング

針金・糊・加热が不要な
製本方法を採用し、
リサイクルや怪人の危険へ
配慮しています。

RICE INK この印刷物は環境にやさしい
米ぬか油を使用したライスインクで
印刷しています。

まつて半世紀もしない時期の大改革だった。先祖の土地を大切に守る農民が、どうして、これほど大胆な方向転換をしたのか。

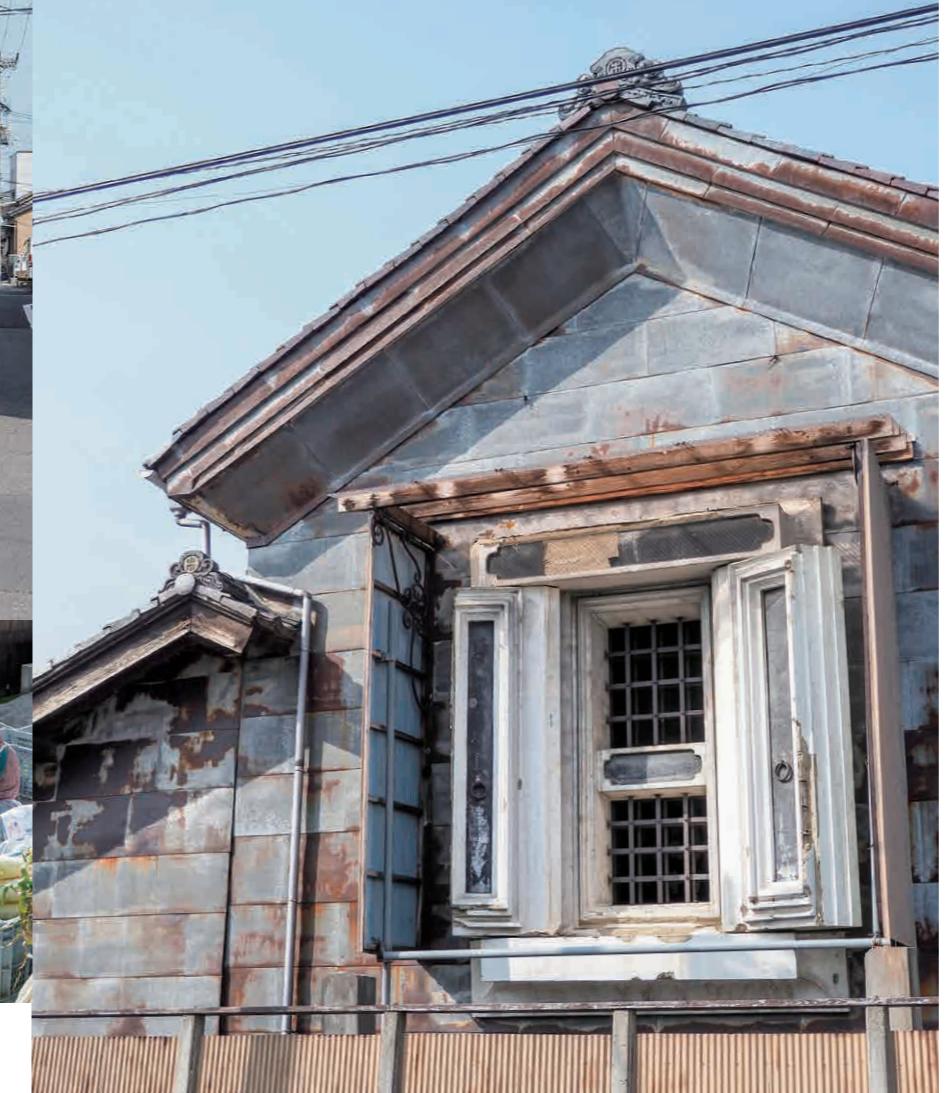
盛に行き来する。この土地のメリットを活かす町づくりをすれば、将来の可能性が広がると考えたのである。同時に人が集まる六斎市の開設も願い出て、許可されている。

この新しい町が、亀田町。町の建設中に大きな亀が出現したことから、新発田藩の役人によって、この名前がつけられた。現在のＪＲ亀田駅前から南側に延びる本町通り界隈である。そこでは当時の町建てを基本とした道の両側に商店が連なり、そ

イドブックを、ほんのつい最近発行しました。亀田と言えば、胸まで水に浸かって田植えや稲刈りをせざるをえない地域、という暗いイメージで語られることが多いです。でも、それは一部の地区の田んぼで、すべてが劣悪な環境だった訳ではないのです。その従来の一律的なイメージを払拭したいと思ったのが制作のきっかけでした。そして地形や町並みは、この地域にしかない固有の財産であることを、もっと誇りたいとも思いま



320年前、農民たちによって誕生した亀田の六斎市は、当初から近郷近在の人で賑わった。市には生活物資のすべてが集まり、市は野天のショッピングモールだった。現在も毎月3と9のつく日、朝早くから市がたつ。



農民の方向転換

新潟市江南区の旧亀田町に編集室を設け、
新潟県の誇る地域資産を再発掘することを目的に、
県内各地の宝物とそのルーツを探つてきた。が、迂闊なことに
足元の亀田町を見過ごしてはいた。身近すぎて真価に気づかなかつた。
創刊十周年を二度目のスタートのつもりで、
あらためて亀田町を深掘りする小さな旅にする。

おかげさまで小説は、今号で創刊十周年を迎える。

想　　大湿地帶の霸者

亀田町は、十三年前の三月に新潟市に編入合併した。現在は江南区の一部になり、その町名を行政上で使つてゐる。しかし、今これら

われることはない。しかし足元に立つる大地が亀田の来し方を鮮明に記憶し、人びとの心にも〈亀田人〉が刻印されている。

亀田町は江戸初期の七十年ほど の間に、新田開発とともに次々に誕生した二十の地区からなる。それらの地区には、それぞれ開拓史があり、それぞれに違う发展史がある。でも基層とする精神は、すべて開拓者精神に収斂していく。時代の先を読む進取性と柔軟性、行動力、そしてめげない忍耐力。約一七キロ平方メートルの小さな町にもかかわらず、この気質が独自の産業と文化を育んできた。それは江戸期まで未開地だった原野の開発から始まる、近世

蒲原平野が見渡せる。霞がかつた空の下に、まだ冬を留める遠くの山々が白光りし、その山裾に這う集落群から、所々に島のように畑や果樹園を置く真っ平らな田んぼが、海側の市街地と弥彦・角田の山々に止められるまで延々と延びている。頭のなかで地上の近代的な構造物を消去すると、大地の原型がはつきり見えてきた。江戸時代まで眠ったままの大地が、そこにある。事を成そうとする人には、夢の大地だったに違いない。ここに、ひとりの開発者が渾身のひと鉢を入れたことから茅野山の歴史が始まつた。およそ四百年前のことである。

から現代までの日本の産業発展史とそのまま重なる。

時代の流れを読む

の裏手の通りに六斎市が三百二十年の命脈を保ちつづけている。市のまわりには鬱蒼と茂る大地主の屋敷林や、大きな土蔵があり、人当たりのいい空気が流れている。かつて亀田町の行政機関が密集していた地区でもある。

砂丘列があるなんて意外。それも縄文や弥生人が暮らしていた。「砂丘の上に築かれた町は、それぞれ個性的です。ぜひ現地を歩き足元から伝わる歴史を味わってください」。かめだ学会という市民のボランティア団体です。

如言人傳

木の葉の書



先の見通せない道の脇に、風情のある住宅や蔵が現れる。町のいたるところに消火栓があり、いいアクセントになっていた。なかでも目を惹いたのは外装がトタン張りの古い工場。風雨に晒されたトタンのダメージ具合が芸術的で、つい長い時間見入ってしまった。

※亀田町という町名は現在使われていませんが、小説では、この名を後世に伝えるために、あえて「亀田町」と表記しております。

知性と勁さ

つくる 大地の記憶

亀田の世界的ブランド

JR新潟駅南口から亀田方面につづく幹線道路沿いの町並みは、都市と町の境界が溶け、地域の個性が埋没したかに見える。だが、そうではない。大地に根をおろした農民と深くかかわり世界的にも知られる企業や水利組合が、歴然と存在し地域の個性を伝えている。

その、ひとつが「亀田のあられ・おせんべい」でおなじみの亀田製菓株式会社である。国内の米菓製造業界の最大手。海外事業もいち早く展開した。なんと、その前身は終戦直後に発足した亀田郷農民組合。農民の智慧と行動力が、時代を先駆けて農業の六次化に取組み、次々に独創的なヒット商品を世に出し現在に至っている。亀田工業団地の広大な敷地に本社工場があり、堂々とした威儀を放っている。

そして、もうひとつが亀田郷土地改良区。亀田郷の農地の水利シ

み、自分の田んぼに入れるのである。一日に何回も何回も。田んぼの底が少しでも高くなるのであればと、大海に墨を一滴流すような作業を続けていた。大地の宿命に対し、人間の精一杯の抵抗だった。一方、周辺の標高の高い田んぼがある農村部は、明治期に牛馬で耕作する先進的な農業技術を受け入れ

農民たちのほんとうの凄さ

生産性をあげていた。そんななかで独特的の農法を守ることが、先祖の業績を次代につなげることであり、亀田郷の農民の負けん気だったのかもしれない。

その大景観は、戦中から戦後にかけて行われた土地改良事業によって出現し、歴史時間にすれば、生まれたばかりの新風景である。それまで大地の地形に沿った不定形な区割りだった田んぼを、一定の規格に再

大地の大改造

その地點から新津丘陵の足元まで、耕地整理された見事な水田が、大きな空のもと、どこまでもどこまで広がっていく。



水が深い田んぼの地区では、刈り取った稲を舟に積み、水路を伝って遠く離れた場所のはさわらまで運んでから自然乾燥した。水郷亀田郷ならではのさ掛け風景。



昔の子どもたちは普通に農作業を手伝った。学校帰りなのだろう、少年が学生ズボンを汚すことなく気にせず膝まで水に浸かって稲刈りをしている。その表情は頗るしく、誇らしげだ。



はさ掛けの準備をする家族。みんなの笑顔が夏の陽射しをうけ、いっそう輝く。確かに土地改良前の亀田郷は、すべて手仕事で行う農業が他郷より長くつづき、そのうえ「客土」という特殊な作業があり、いまよりはるかに大変な労働だった。でも、この4人の顔からその苦を感じられない。

寸前に追いこまれた事態を、団結力で乗り越えた知性と勁さにある。当時の土地改良区の理事長・佐野藤二郎の政財界への勢力的な働きかけと、改良区の会員の「全員一致」という信念を貫いた粘り強い説得に応じた農民たちの協力で、数年後には財政再建し、収量も改善された。

そして現在の亀田郷は、地域環境づくりという大局的な視点で、都市と農村が共生する農村づくりが進んでいる。その鍵を握るのも、やはり水である。環境用水といふ概念をつくり、農業用水を活用し水辺のある田園風景を創出する先進的な取組みが行われている。

土地改良前の水郷地の農作業を記録した映画がある。昭和二十八年に制作された『葦沼』(新潟県農林部監修)である。重々しい語りとともにモノクロ画面に映し出される、沼のような田んぼの農作業はあまりに過酷で言葉を失う。だが亀田砂丘の存在を知り、少し明るい気持ちになる。さらに、ここに紹介した写真と出会い救われたおなじ頃の亀田郷のある農村のワンシーンである。水郷地帯独特の苦勞があり、他の地域より生産性が劣つても、みんなで力を合わせ、ひと筋の道を歩む家族の肖像。こんなポジティブで明るい笑顔の方が、開拓農民たちが拓いた亀田郷にふさわしい。

■ここで紹介した土地改良前の亀田郷の写真は、すべて写真愛好家だった塙田一郎氏が昭和20年代の新潟市江南区鍋渕新田付近を撮影した貴重な大地と水の記憶です。同時に江戸時代からつづいてきた日本の伝統的農法のラストシーンを、時期を逃さずフィルムに焼きつけた塙田氏の心の遺産もあります。

ステムを総合的に管理する法人組織である。亀田郷の大地の記憶と、激変する時代の波と対峙してきた農民たちの闘争史が、この組織の存在にこめられている。その先進的な取組みと圧倒的な存在感が、

国

内外の農業関係者や農政関係者によく知られ、一目おかれている。

亀田郷の農民である。庁舎は市街化区域と農業区域が接する付近にあり、都市化の波から農地を守る城門のように、重厚さを身に籠めて建ち時代の先を見つめている。

その地点から新津丘陵の足元まで、耕地整理された見事な水田が、大きな空のもと、どこまでもどこまで広がっていく。

構築し、用排水のネットワークを巡らして創出した大地と人の壮大な協働作品でもある。この事業は、愛用者、八郎潟干拓とともに日本を代表する三大土地改良として謳われ、全国の耳目を集めめた。この大事業の最終段階である耕地整理を推進するための農民サイドの団体があり、亀田郷土地改良区である。これは食糧増産を目的に行われた国策事業で、低湿地帯に起因するマイナス要素を抜本的に改革し、反当たりの増収を図るものだった。その盤石な風景の足元を支える大地の、なにが問題だったのか。

亀田郷は、ふたつの大河・信濃川と阿賀野川の最下流部に広がる農村地帯である。日本海側最大の蒲原平野の一部を占め、四方を水で囲まれた、蒲原平野のスリ鉢

燃えるぜ

伝える それぞれの遺伝子

謎めく袋津の迷路

開拓農民がたどった別の道がある。亀田縞は、古くから農家の自家用として作られた木織物。江戸期の一七九〇年頃、その反物を亀田の六斎市で販売したところ、品質の良さが評判になり、周辺の農家で機織りが副業になる。その後、明治期、先進的な機織り具や織物機械の導入により生産力をあげると、副業から機屋専業に移行する農家がふえ、主産地が袋津である。

三月下旬、「迷路の町 袋津を歩く」というイベントに参加する。寒い日もかかわらず二十人近くの参加者が集まり、みんなで迷路の町に紛れこんだ。するとビックリ！ 次から次に謎めいた小路からレトロな建物が飛び出し、瞬時に場所も時代も忘れ、不思議な空間に呑まれ、あつという間の二時間が過ぎた。

後日、町歩き企画したかめだ学会の伊藤純一さんを訪ねる。伊藤さ

んは新潟市の中心市街地に設計事務所を主宰しているが、根っからの亀田人だ。「袋津の魅力は、町全体がヒューマンスケールでできていること。町のスケール感、道のスケール感が人に丁度いいサイズです。メインストリートでも道路幅が四メートル。生活道路も馴れた車でも、やっと通れる狭さ。人しか通れない幅の小路も多くのスケール感、道のスケール感が人にとっています。江戸時代、ここに祖先が住んだ時から、自然発生的にできた町筋が都市開発されることなく、そのまま残っています。そんな迷路の脇に、いまも続く亀田縞の工場や往時の隆盛ぶりを窺わせる大きな工場跡地があり、高い煙突が立つ染め物工場もあります。金魚屋さんが多かった時期を記憶する商店もあります。機屋さんの共同出資と織り子さんたちの寄付によって開設された私立保育園も健在です。そこに新興住宅地が違和感なく混入し、さまざまな時代が積み重なっていることを視覚的に実感できる町です。夜歩くと、もつといい感じです」。

祭りがコミュニティの中心

見物客も、より熱くなります。ここにヒューマンスケールの道がないと、祭りの魅力も半減してしまうでしょう。こうして先祖代々伝わる祭りを、子どもたちに地元の価値や魅力として伝承していくほしいです」。

前述の塚本栄一さんも袋津の出身。母校の小学校へ総合学習の講師で行った時、自分が何十年前の中学生活でやっていたのと同じように、子として伝承していくほしです」。

この神事は、毎年七月十四・十五日の夜に行われる。祭りの本番は先祖の血なのか、男の鬭争本能か、わからないが、何かが降りてくる感じになりました。祭りの本番は先祖の血なのか、男の鬭争本能か、わかながら、また通り過ぎます。その静寂となり、自然にテンションがあがる。星前は本番にそなえ蟬の鳴き声を聞きながら、やかさが交錯する、夏の日が好きだという。



一番組から順番に宮のぼりした組が伊夜日子神社の拝殿前で渾身の木遣りを奉納する。ここ2年ほどは、それぞれの組が宮のぼりを終えた祭りの最終盤、すべての組が全員で木遣りを奉納するという。総勢300人近くの男たちが興奮の極致で唄う木遣りは、さぞ大迫力だろう。(袋津祭り 7月14・15日)【写真提供:新潟市江南区役所】

袋津が一年に一回、もっとも熱くなるという袋津祭りの神事、伊夜日子神社の燈籠押し合いに話がおよぶ。伊夜日子神社は彌彦神社の流れをくみ、この地を開拓した旧家と深く関わると伝えられている。「この祭りは五穀豊饒と織物業の発展を願

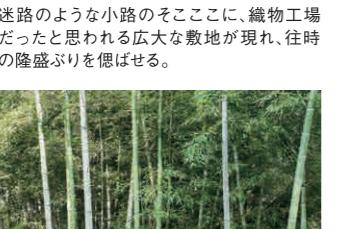
うようになった、やっと大人の仲間入りができると思いました。実際に担いで押し合いをするとスイッチが入りましたね。大柄だったせいで燈籠の重さが誰よりも先にのしかかり、最後はフラフラでしたけどね」と振り返る。そして祭りは男のコミュニティ。祭りをするために住民が集い、準備から本番、打ち上げまでのプロセスのなかで、住民同士の交流が深まり地域の結束が強くなるという。

塚本さんが制作に携わった江南区の祭りを網羅する動画を、ネットで観ることができます。そこでは袋津祭りのほか亀田町の大岩万燈、船戸山

の神事で、神社の氏子たちによって代々受け継がれてきました。六つの組が彌彦神社に奉納する燈籠とおなしのをつくり、大勢の男たちが燈籠を担ぎ町内を巡回し、その華麗さと勇壮ぶりを競うものです。狭い道に見物客があふれ、そのなかで燈籠を押し合う烈しい祭りですが、狭い道が熱気を閉じ込め、燈籠を担ぐ人も

の神楽など、さまざまな伝統芸能が披露され、この地域の文化の多様性を気づかせてくれる。それは、それが地域のルーツとアイデンティティーを浮き彫りにする。その多様性そのものが、時代を読み柔軟に対応してきた開拓者たちの心の表れなのだろう。

大湿地帯の砂丘から始まった、四百年以上の亀田の歴史。それも武士でもなく、偉い役人でもなく、普通の人びとが拓いてきた歴史。この先祖の気概を継ぐ人たちは、これから先、どんな地平線を見せてくれるのだろう。



人工的な町並みの一画で、竹林や常緑樹の巨木が静かに時を過ごしていた。



「祭りの夜が袋津をもっとも魅力的にする」という伊藤純一さん。